

ウイズコロナ時代の 多様な学び

汐見稔幸

2020年7月5日 多様な学び保障法を実現する会総会イベント

コロナ問題を通じて、密集の禁止等を強いられた結果、逆に見つけたもの

- ①近代社会特有の社会のあり方が、根本から問われた。
- ②とくに、都会に密集して、仕事や教育をするというのが、近代特有の仕方ということに気がついた。効率、直接指示、競争のためであった。
- ③しかし、発展したメディアを使えば、それぞれが自分のペースを大事にしなから、密集しなくとも、目的は達成することが可能と分かった。方法は多様にあることもわかった。

- ④ もう一つ、近代の特徴が浮かび上がった。それは人間が自立能力を著しくなくしてしまったということ。
- ⑤ 江戸時代、人々は百姓を目指し、すべて自分でまかかった。近代は分業することで、自分でできることがちょっとしかない、という社会をつくった。
- ⑥ コロナで、仕事を失うと生きていけなくなる、という状況が、しかしこれからはもっと起こる。それを見越した自立生活への根本から見直しが必要。自分の食べる食料は自分たちでつくる社会に戻す必要。地域が支えあう集団になる必要。

学びの多様化へ

- ①三密で授業ができなくなっていて、分散型、ネット型授業に急に関心が向いた。
- ②インフラの整備ができれば、オンライン型の授業でこそできる、個別への配慮が行き届いた授業も可能。
- ③オンデマンドも含めたネットを活用した授業をもっと研究すべし。
- ④学びの個別化と協同化、これは働き方の改革と同じ問題。
- ⑤これを機に、学校、教育の多様化の機運を高めたい。